

## パネルディスカッション

## 生まれてから死ぬまで地域で暮らすために

～介護・福祉・医療・教育の連携でつくる未来～

## コーディネーター

大塚 ゆかり

山梨県立大学  
人間福祉学部教授

## パネリスト

青柳 暁子

山梨県立大学  
人間福祉学部准教授

## パネリスト

佐竹 真紀

デイサービスセンターつづく  
代表取締役

## パネリスト

露木 里恵

暮らしの保健室  
晴ればれ代表

## パネリスト

前川 有希子

山梨県立大学  
人間福祉学部講師

## パネリスト

望月 こずえ

助産院peekaboo院長



## 【第1部】

▼大塚:皆さま、おはようございます。この第9分科会は、人が生まれてから死ぬまで、自分が暮らしたいところで暮らすためにはどうすればいいか、ということを中心に検討を重ねてきました。山梨県内で活動している女性を中心とした現場の方たちの話を伺う中で、人が暮らしていきたいところで暮らすということを考えていきたいと思っております。コーディネーターの山梨県立大学の  
大塚と申します。よろしくお願いいたします。「日本女性会議2021 in甲府」では、個の多様性や多様な価値観の尊重を大切にしています。そうした中で、多様な価値観とは何か、それを具体的に地域でどのような活動をしていけば、お互いに理解が進むのかを考えていきます。では、パネリストの方々、自己紹介をお願いいたします。

▼青柳:山梨県立大学の青柳と申します。よろしくお願いいたします。

▼前川:山梨県立大学の前川と申します。今日はどうぞお願い申し上げます。

▼佐竹:山梨県甲斐市で、「デイサービスセンターつづく」を運営しています、佐竹と申します。よろしくお願いいたします。

▼望月:山梨県笛吹市で、助産院と訪問看護ステーションを営んでおります、望月こずえと申します。よろしくお願いいたします。

▼露木:山梨県甲府市で訪問看護と介護に関わる仕事をしております、露木です。よろしくお願いいたします。

▼学生:山梨県立大学の学生です。よろしくお願いいたします。

▼大塚:ありがとうございます。このようなメンバーで本日は進めていきたいと思っております。パネリストの方たちは、山梨県内で事業を立ち上げ、訪問看護や介護予防、助産院といった人が、生きていく中で必要なことを実践されています。その中から見

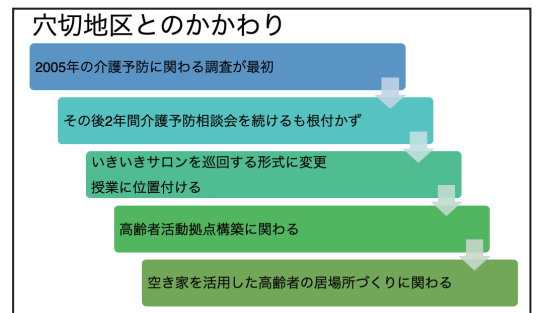


えてきた課題や、これからの未来を考えていくにはどのようなことをしていけばいいのかを話し合っていきたいと思います。時代は変わってきていて、女性の働き方や暮らし方もかなり変わってきています。そのような中で、今、私たちに何ができるのか、これからにつなげていけるのか、ということを考えていきたいと思います。では、パネリストの皆さん、まず現在の活動を紹介してください。

▼青柳：大学の周辺地域・穴切地区で活動を行っています。私自身は、山梨県立大学で地域研究交流センターという、地域との連携を図る部門で部門長をしています。現在、3つの活動を行っています。1つ目は穴切地区のいきいきサロンでの介護予防相談会、2つ目は穴切地区をモデルとした高齢者拠点構築、3つ目に穴切地区の空き家を活用した高齢者の居場所づくりです。穴切地区は、山梨県立大学飯田キャンパスの周辺地区ですが、大学との関係はあまり深くありませんでした。ぜひ、仲良くしようということで、穴切地区にお願いすることになりました。そもそも3つの活動はどのようになったのかと言いますと、2005年、介護予防に関わる調査を穴切地区にお願いしたのが最初です。



それから2年間、介護予防相談会をしました。あまり根付きませんでした。最初の1年は100人くらいおいでになったのですが、その後なかなか人が集まらないということで、地域に7カ所あるいきいきサロンを巡回する形式にしました。授業にも位置づけ、学生がそこに行って介護予防をするようになりました。すると、住民の方から高齢者の活動拠点をつくらないかというお話があり、高齢者活動拠点構築に関わりました。その後、甲府市から最近問題となっている空き家を活用しませんかというお話があり、たまたまマッチングしたお家が穴切地区にありました。そこを中心に色々な活動をしよう、今

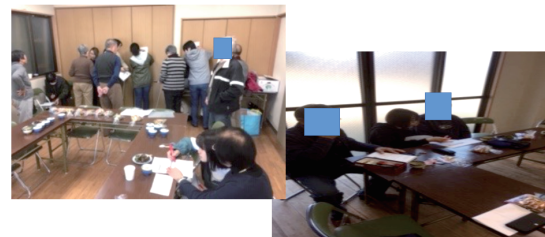


大学での介護予防相談会の2年間ですが、いろいろな方に来ていただき、学生と一緒に取り組みました。介護予防相談会の方法は、東京都健康長寿医療センターで介護予防運動指導員の免許を取り、そのシステムをそのまま使わせていただきました。ただ介護予防をするだけでなく、介護予防の相談もできるように地域包括支援センターにもお声かけをして、最後に相談に乗っていただくようにしました。何人かが相談をして、地域包括支援センターにつながりました。介護予防に関しては、片足で10秒立てるかどうかなどいうようなことをしています。また、東京都の健康長寿医療センターから出された「おたっしゃ21」という質問項目をもとに握力などを測りました。また、大学の太鼓クラブにも入っていただき、太鼓を触って楽しんでいたり、ゲームや指編みをしたり、楽しみながらできる介護予防も企画しました。しかし、人が集まらないということもあり、これを巡回式にしました。公民館に出向き、体組成計で体調を見てもらったり、結果を説明したりします。巡回型の介護予防相談会では、測定結果を学生さんが説明するということをしています。それから高齢者拠点構築の件ですが、これは今、山梨県立大学の重点テーマ研究に採択されています。拠点づくりを模索されていた自治会長さんからお話があり、大学としてバックアップすることになりました。

大学での介護予防相談会の2年間



巡回式に変更



当初、最初の案としては、穴切小学校という廃校になった小学校の教室でボランティア・将棋・囲碁・編み物・陶芸・園芸・ダンスを考えていました。教室ごとにそれぞれの活動を行い、拠点とし、行き来できるようにしようというものです。しかし、コロナ禍になったため、教室ではなく、体育館で距離を置いてワークショップをしようとなり、ところがさらにコロナ禍がひどくなり、禍がひどくなり、今は、YouTubeを活用したやり方をとっています。このような活動の課題としては、マンパワーの問題もありますが、連携の問題として、地域のさまざまな組織とのすみ分けや連携のあり方を考えていきたいです。私がやっている3つのことだけでも連携がうまくいかないの、連携のあり方というのも考えていき

コロナ禍での案 YOUTUBEの活用





たいし、同じような形態の組織との連携、どのような連携のあり方がよいのか、持続可能なフレキシブルな連携のあり方を考えていきたいと思えます。

▼前川:私は「いつまでも地域で暮らし続けていくために~足の健康、気にしていますか?~」という内容でお話をさせていただきます。子どもが生まれると日々成長していきます。親としては子どもに「這えば立て、立てば歩け」という期待を寄せ、2本の足で歩く喜び、満足します。歩くことは自立という意味合いを含めているからだと考えています。地域でいつまでも自分らしく暮らしていくためには、自分の意志で立ち、自分で目的に向かい歩いていくことが求められます。皆さまは自分の足をじっくりと見たことがありますか。歩くために、足を気にされていますか。私は山梨県立大学で、介護福祉士を養成する教員です。心身状態が悪くなり、誰かに生活の中で支援を受ける状態になっていくことは、年齢を重ねていくと当たり前のことです。



しかし、好んで要介護状態になるのではありません。いつまでも自分の足で歩くためには、その心構えとそれに向けた行動が必要です。そのために、皆さまには足の健康に意識を向けてほしいと考えています。馴染みのある地域で暮らすためには、歩く能力が必要です。私は甲府市内の山間地に出向いて、お住まいの方に足を見せてもらう活動をしています。歩くためには適切な靴を履きます。靴を履くためには、足の爪を整えることが必要です。皆さま、足の爪は自分で切れますか。足にタコや魚の目、痛いところはないですか。私は、住民の方たちに「足を大事にしてね」とお話をしています。皆さま、ご自分の足の状態をご存じですか。足のどの部分に体重がかかっているのか、足の裏の形はどのようになっていますか。私はフットプリントという足の形を取る様式を使って、皆さまにご説明をして、目で見ていただいています。外反母趾や扁平足、タコや魚の目の具合を見て、適切に対応してほしいです。これは、ある方のフットプリントですが、足の指が4本しか写らず、後ろに体重がかかりながら歩いている様子が確認できます。

足の指が4本しか写らない

ここ！  
タコが  
あります

踵に力が  
入ってる



そもそも私が足の健康に興味を持ったきっかけをお話しします。山梨県は健康長寿日本一で、大学の隣のグラウンドでも、グラウンドゴルフが盛んに行われ、元気な高齢者がとても多い印象を受けます。しかし、施設で実習巡回をしているうちに、高齢者には足の爪が変形している事例が多いことに気づきました。歩けないのは、筋力が弱まったと決めつけるのではなく、歩くためには、きちんと靴を履く。そのために、爪の様子や指の形、足の健康について、足全体からアセスメントすることが必要だと考えます。高齢者になってから気を付けるのではなく、日々の習慣になれば良いと思います。究極の介護予防は乳幼児期からと言われます。この分科会で作成したパンフレットの中に、「足の骨の数はいくつですか?」というクイズを入れました。(答えは、片足28本です。)子どもが概ね1歳になると靴を履き、足は靴と大きな関係性を持ちます。概ね18歳で足の成長は止まると言われていますが、この18歳までの間に、健康的な足をつくっていかないと、歩きにくい足とともに生きていくことになります。

成長期である子どもたちが写真のような靴を履き続けていても、健康な足を維持できるのか、ということは非常に大きな課題です。足の健康は、子どもから高齢者まで皆に共通する課題だと思います。

私が、今後目指すものは、人が生まれてから亡くなるまで、その人生を自分らしく生き抜くために、生涯、歩行が可能である足の健康への意識づくりです。いつまでも歩くための足づくり、足が健康であるという考え方や行動に対して、この山梨から発信していきたいと考えています。

▼望月:山梨県笛吹市で助産院と訪問看護ステーションを営み、骨盤ケアや母親学級なども行っています。県内の総合病院、個人病院を経て、最初は出張専門でスタートし、県外での研修の後、2012年に甲府市で助産院をスタートしました。助産院と言っても、骨盤ケア、赤ちゃんのケア、周産期の体のケアを中心に行っていました。出産については、オープンシステムと言って、病院での分娩室を借りて、検診を病院と助産院を交互にして、出産は必ず私が行くというスタイルです。5年前、石和に移動し助産院をしています。10年以上やっていると、社会情勢により産む人も赤ちゃんも体が変わってきているのを実感しています。例えば、骨盤ケアのベルトは10年ちょっと前まではSとMがたくさん売れていましたが、今はSが全く売れず、Mもまれで、LかLLサイズが主流で、骨盤の広がりが大きくなっていることが分かります。ニーズも変わってきています。体、心、夫婦問題などがすごく多く、お財布の紐も固くなっています。

成長期の子どものような靴を履き続けていいの?

どのような足になっていくの?



写真引用: JAGSS 日独小児靴学研究会ホームページ (Japan & Germany Children's Shoe Science Study Group) <http://jagss.jp/>

足の成長に悪影響を及ぼす靴の変形



今のままだと私たちの活動が必要な人に届かないと考えていた一昨年、今日のパネリストでもある露木さんとの出会いで、訪問看護ステーションを始めさせていただくことになりました。露木さんから、「助産師さんも訪問看護できるわよ」と言われ、全く頭の中になかったことなのでびっくりしましたが、もっと活動が広げられるのではないかと、たくさんの方のニーズに答えられる場所になるのではないかと、思い、スタートしました。最初は周産期に特化したところや医療的ケア児が中心でしたが、今年の4月からは職員も増え、介護保険の分野や在宅療養の方のところに行っています。出産は現在もオープンシステムと自宅出産をしていますが、出産数は減っています。助産院で出産しようと思っていた方も異常に傾いてしまうことがすごく多く、なかなか助産院や自宅での出産数は上がっていきません。産む施設は足りていますが、異常出産が多いこと、妊娠中や産後のトラブル、悩みがとて多く、一人に関わるサポート量や時間を要し、マンパワーが足りていないと感じています。社会情勢の変化もあり、助産院は経済的に余裕がある方でも、1人目は来れたけど、2人目、3人目は経済的に利用できないという声もたくさん聞くようになって、なんとか料金を下げようかと考えたのですが、料金を下げると助産院の活動や私たち自体も生活できなくなってしまうということもあり、露木さんとの出会いにより、私たちも利用者も助けられたのではないかと思います。



アロマタッチ



各種指導



まなびの場：マザークラス(MC)



オリジナル整骨(赤ちゃんから大人まで対応)

訪問看護を始めて感じたのは、助産院に来ている方は、ほとんどの方が母乳育児はうまくいっていたのですが、病院の依頼で伺った方たちは、母乳が出ない人や母乳が出ても赤ちゃんが飲めないケースが多いということ。おっぱいで困っている人がこんなにもたくさんいることを目の当たりにしました。母乳育児は妊娠・出産が大きく影響して、大変なお産だと、その後のメンタルも不安定になり、赤ちゃんの状態も変わってきてしまいます。訪問看護により、自分たちが助産院としてやりたい軸に気づかせてもらいました。

課題としては、時代の変化や核家族化、県外の方の移住者も増えて、子ども一人に関わる大人の数が減少しています。コロナ

禍でさらに深刻になっていて、母親へのサポーターが少なく、地域で関われる場所、環境が縮小し、孤独に子育てをしている人が増え、夫婦関係にひずみが出てしまったり、親子関係にもひびが入ったりもしています。その環境が虐待・DVが増加する背景と大きく関わっているのではないのでしょうか。だからこそ、私たちの関わりや地域への関わりがすごく重要だと感じます。しかし、そこにまだ手が差し伸べられていません。

助産院ではほとんど外部と連携をとることがなかったのですが、訪問看護を始めたことで、病院からの依頼で必ず医師とのつながりがあるということ、病院スタッフとのつながりはできました。しかし、私たちから発信するつながりは助産院をやってきた時から少ないと感じているので、地域で活動する者同士の連携には難しさを感じています。

▼佐竹：山梨県甲斐市で「つづく」という小さなデイサービスセンターを運営しています、看護師の佐竹です。「つづく」をつくるきっかけは、私の子どもが学校に行けなくなったことから始まっています。当時、私は過疎地域の集落支援員をしていましたが、精神的に落ち込み、学校に行けない子どもを置いて仕事に行くことが難しいと感じ、泣く泣く仕事を辞めました。その期間に子どもと色々な体験をして、なかでも一番が耕作放棄地を100坪ほど借り、何も農業の知識が無い状態から、クワ一本で開墾を始めたことです。この畑自体が「つづく」の第一歩になりました。そのころは、上手いくか分からないけれどチャレンジから始めて、趣味で始めた知識で食べられる草を探したり野菜を採ったり、集落支援員をやっていた時に狩猟免許を持っていたので、たんぱく質は山からもらい食生活を営んでいました。



しかし、だんだん家計が苦しくなり、お金が無いと生活できないな、でも子どもを置いて仕事には出られないとすごく悩みました。子どもと一緒に働ける場所を探しましたが、なかなか無かったので、それであれば自分が過ごしやすい場所を作ったらどうかということで、自分でデイサービスを立ち上げることにしました。その際に「こうだったらいいな」という自分なりの幸せの形を考えてみました。自分を必要としてくれる人がいること、家と同じくらい快適に過ごせる場所、一番は、





子どもと一緒に過ごせて安心でき、私自身が働くことができる場所。そういう場所を目指しました。デイサービスセンターの名前は「つづく」。連続ドラマのエンディングに出てくる「来週につづく」という意味の「つづく」です。皆で普通の生活を思いきり楽しむための場所で、次に来ることを楽しみにするような、ワクワクした気持ちで待っていてほしいという思いを込めています。「つづく」では、現役や元農家さんに指導してもらって皆で畑を作ったり、各家庭で味の違う郷土料理のほうとうを、利用者さん主体になってもらって、「今日は〇〇さん家のほうとう」という形でほうとう作りをしたり、元パン屋さんにパン作りなどできることを教えてもらって、スタッフが利用者さんを支えるだけでなく、スタッフも利用者さんに支えてもらいながら生活をしています。天気良ければ外へ出て、気持ちの良い空気を吸いに行きます。お昼には一緒にご飯を食べながら、一緒にその時を共有していきたいと思いつつ時間を過ごしています。

私自身は看護師ですが、病院で働いていた時に、病気の治療のためにさまざまな制限をすることにとっても違和感がありました。自分の中で記憶に残っていることは、亡くなる直前の方の病室に行った時、その方が「歩きたい」と言うので、家族が起こしてどうにか足踏みをしている場面を見ました。看護師として私もご家族と一緒に支えたいと思い手伝っていたら、先輩の看護師からものすごく叱られた経験があります。また、三交代勤務の勤務後に見てあげたいという看取り期の患者さんがいて、横に付いていたら、先輩の看護師に次の勤務の人が働きにくいから帰るように言われ、帰ったのですが、次に自分が勤務で来た時には、その方のベッドが空っぽになっていました。そういうことの一つひとつが自分としては不消化で、病院の医療は自分には合わないと思んだ時期もあります。

私が介護業界に入った入口は、障害者施設でした。まるで一つのまちを表しているようなところで、病院勤務の時は絶対に言えなかった「またね」「会いたかったよ」という言葉が普通に出てきて、ホッとしました。会いたい人に会いに行けるという当たり前のことに病院勤務ではできないと気づきました。

右のイメージは、私が妄想している「小さな村計画」です。ベースは山になっています。子どもが辛かった時期に山の恩恵をすごく受けたので、山にはいろんな資源がたくさんあることを知っています。そこに小さな小屋をいっぱい建て、若者がパソコンで外部に情報を発信したり、力仕事をしてくれたり、山を知っている年配の方や農家の方の知識をもらい、皆で食べられるものを生産して暮らせたらいいかなと思います。自分では何もできなくても、その人がいるだけで周りがほっこりする、それがその人の役割になっていくような場所ができればいいと妄想しています。どんな状態になっても、いくつになっても皆、何かしらの役割があって、認め合える場所になっていくといいなと思います。



今は、「つづく」の人たちが地域に認められ、溶け込んでいける場になっていけばいいなと思いつつ活動しています。今、近所にある公園を借りて高齢となった自治会の人たちの代わりに、利用者さんが草むしりや花を植えたりなどの管理をさせてもらっています。そこに地域の人たちも水やりをしてくださったりしていて、少しずつ地域が動いている姿を見ると、とても嬉しいです。これから寒くなるので、庭で味噌汁を作り、誰でもやって来て腰掛けられるようなベンチを設置できれば、地域との交流が生まれるのではと計画しています。「つづく」に来ている利用者さん同士はとても仲良く触れ合っています。また、学校ではない場所に居場所を求め、「つづく」とつながった子どもたちも来てくれています。利用者さんのマスクを手縫いで作って届けてくれたり、利用者さんの100歳の誕生日にギターを演奏してくれたり関わってくれていました。「つづく」の利用者さんは、60代から101歳までとさまざまです。雰囲気は利用者さんに任せています。毎日、何が起きても楽しめるような場所なので、わくわくしながら過ごしています。利用者さんの背景もさまざまなので、行政と連携することも多いです。また、地域の中には、相談先も分からず、困っていることも口に出せない人がたくさんいると思います。実際、「つづく」とつながった利用者さんの中にも、日々のお買い物・ゴミ出し・受診など小さな困りごとが埋もれていると実感しています。そういうところをみると、介護保険上の制度だけでなく、地域の人たちに合ったものが構築できればいいと感じています。ただそれをどう形にするか、どういふふうにしたら困っている方に出会っていけるのかが課題です。また、私たちがどのように柔軟に対応できるかを今一度考えていかなければならないと思っています。



▼露木：株式会社洗心代表で訪問看護師の露木里恵と申します。本日は「病気になっても、障がいがあっても、住み慣れ

た地域・家で暮らし続ける、そして死ぬために」と題してお話を聞いていただきたいと思います。次ページの写真は、私が35歳の時、第1子を妊娠中、白血病を発症し、出産後に抗がん剤治療を受けている様子です。子どもを背負い、24時間点滴を受けています。当時、白血病は死亡率が高く、長い期間入院が必要な病気でした。

私は、子育てをすることなく死んでしまうことがどうしても受け入れられず、死ぬのなら家で子育てをしながら死にたいと本気で考えました。当時は長い入院が必要だと言われてのですが、病院の先生や看護師・往診の先生・訪問看護師に無理を言って、家で治療することを選びました。結果、こうして白血病を治すことができました。

私は私と同じように病気になっても家で暮らしたい人のために、訪問看護を一人で始めました。何の宣伝もなく、一人ひとりの患者さんと向き合う訪問看護師をしていたころ、一緒に働きたいと考えてくれる看護師が集まり始めました。「病気になっても住み慣れた家で生活したい、その暮らしの中、家で看取ってあげたい」という思いに賛同する仲間が増えていきました。看護師一人では、叶えられない患者さんの希望も、仲間と一緒になら叶えられると実感した時期です。2012年、株式会社洗心、訪問看護ステーションつゆきを設立しました。当時は看護師7人、事務員3人の会社でした。看護師だけでは患者さんの生活を支えきれないので、ケアマネージャー、ホームヘルパーともつながり、さらに仲間が増えていきました。それは、社員を雇用するという考え方ではありませんでした。同じ理念を持っているか、持てるか、その理念に向けて一緒に活動できるかが大事でした。住み慣れた地域、家で暮らし続ける。それを支えることが私たちの使命だと考えて働くということが大事でした。そういう仲間が徐々に集まって増えていきました。

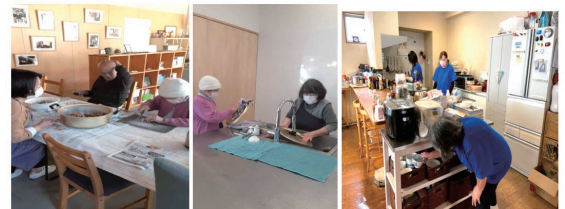


白血病な訪問看護師

私たちの活動の核となる部分に、第2の我が家づくりがあります。一人暮らしや核家族、家で最後まで暮らし続けたくてもできない方のために、第2の我が家を作りたいという思いで、お家をつくりました。ここは施設と同じようなケアを受けることができますが、少し施設とは違います。何をしたいか、どう暮らしたいかは自分で考えて決める。そして一緒に家族である他の利用者さんや職員と譲り合って暮らします。できることがある人は、自分のためにも仲間のためにもできることをするという考え方です。タバコやお酒も話し合っ決めてます。動物を持ち込むことも、初めから拒否することはありません。利用者さんのジュンちゃんは生まれながらに障がいを持っています。ジュンちゃんの周りには彼のお母さんのような女性たちで、ジュンちゃんリビングに来ると皆が集まって来ます。お世話をする若者の職員はジュンちゃんにとっては弟のような存在で、ジュンちゃんは世話をしてもらっているにも関わらず、小言を言ったりします。また、がんを患い、一人暮らしで治療を続けていた男性もいました。彼は病院での治療より、第2の我が家での生活を選びました。彼が余命1週間になった時、最後の希望を聞くと一緒に暮らす皆との花見を希望しました。食道がんでしたので食事はできませんでしたが、大好きな焼酎を飲みながら、隣の仲間に天ぷらを取り分けてあげている様子が忘れられません。利用者さんが他の利用者さんの食事の様子を気かけたり、90歳を超えたおじいちゃんが子どもに離乳食をあげて、あやしている姿も見られます。第2の我が家なので、私の息子も、医者のお主人も、一緒に食事をすることがあります。食事の準備は75~80歳の利用者さんだった高齢者が一緒に働いてくれています。

高齢者の中には、一人暮らしや生活保護を受けていたり、誰ともつながっていないばかりに病気になったり、元気を失っていた人も多くいます。でも、私たちの家に来て、元気と活力を取り戻し、まだまだできると考えています。人のために、自分のために働いてお給料をもらい、尊厳を持って暮らしています。私が病気だった時、子育てに協力してくれた職員が、今75歳を迎えました。でも定年はありません。明日から利用者さんになる日まで働き続けますと笑っています。職員のお父さん、お母さんも我が家の利用者さんになっています。自分一人で親の介護をしようと思ったら、仕事を辞めなければならないという女性も多いと思いますが、職員100人が束になってかかれ、時間の都合をつけて乗り切ることができます。私も主人の母親・自分の父親を、看護師・ヘルパー・ケアスタッフに託し、朝から晩まで仕事に没頭しています。夜、家に帰って、2人がすやすや寝ている顔を見るのが楽しみです。当社の職員は100人を超えました。その90%が女性です。シングル、がん経験者、親の介護をしている人、医療ケア児の母親など。皆でつながっていることで、一人ひとりが孤立せず、社会の一員として胸を張って生きています。

### 一緒に働き続ける高齢の仲間



また、私が運営する「暮らしの保健室晴ればれ」では、看護師が作る健康料理をとおして、一般市民の皆さまの中に飛び込んでみました。私が思っていた以上に皆さんにとって、看護師は病院の中にいるものとして認識されていました。



看護師がまちの中に出て地域住民とつながることで、皆さんが必要としていることが分かるし、お役に立てることが見つかると感じました。コロナ禍で集まることはできませんが、がん・子育て・介護・医療などの相談を気軽にいただき、つながりを広げています。私たち女性が新しい試みを行おうとする時、儲けたいと考える人は比較的少ないと思っています。私も儲けたいという考えはなく、私自身が自分で考え、運営できるものが欲しいと思って会社をつくりました。ホスピスホームや有料老人ホームで、人が暮らし安心して死ぬことができる場所が今の甲府には無かったため、私たちが作ってしまえばいいと思って開設しました。利用者さん・患者さん・職員・その家族が大きな家族の一員となる家のようなものでつながりながら、生きていける場所を作りたいと考えています。10年間、つながりは徐々に広がっています。起業し、会社をつくるのが目的ではなく、暮らししていく家をつくり、同じ方向を向く家族をつくり、その中で病気、障がいがあっても、住み慣れた地域や家、暮らしの中で死んでいくことができるしくみを作ることが私たちの望みです。

▼大塚:これからディスカッションに入りたいと思いますが、今の活動紹介の中で追加はございますか。

▼青柳:高齢者の拠点として廃校となった小学校を使うという話で、今はYouTubeを活用していることについてです。YouTubeをモニターに写し、運動やクイズをするやり方をしています。コロナ禍ではこれが精一杯で致し方ない思いです。また、空き家活用については、学生さんに任せていましたが、学生さんがやっていく中で難しい部分がありまして、今は滞っています。

▼佐竹:地域に根差すのに、訪問看護ではなくて、なんでデイサービスなのかと聞かれることがあります。私の中ではデイサービスは、施設に入っていない入院もしていない方たちなので、自分の意志でいろんなことを決定できるギリギリの段階だと思います。利用者さんのやりたいこと、生きたい場所、会いたい人などの希望を何かしらの形で一つひとつ叶えていけないかなと思いデイサービスを始めました。実際、がんの末期の方も利用されていて、県外から来た方は、富士山を一回見てみたいというので、職員と一緒に富士山にお連れし、「一番いい風景を見たよ」と喜んでいただきました。デイサービスの機能として、良いのか悪いのかは自分にもよく分かりません。ただ、制度上に乗った形で違反にならない範囲で、できる限りの精一杯ができればいいなと思っています。

▼大塚:今回、社会福祉を学んでいる学生さんたちも参加しています。5人のパネリストのお話を聞いて感じたことはありますか。

▼学生:地域に出ることの大切さをすごく感じました。どなたも、施設の中に留まるのではなく、地域の人とつながることを大切にされていることが分かりました。その中で、支え合うことを自分一人ではなく、周りの人とやっていくことが大切なんだなと感じました。

▼大塚:パネリストの方たちで、お互いに質問などはございますか。2部にもつなげていくことになりますので、発言をしていたらと思います。

▼露木:皆さん、病院や助産院など、もともとあるしくみに留まらず、おもてに飛び出していき、自分たちの可能性を広げていく。でもそれが意図ではなく、人から必要とされることになんとか応えていくために、作り出したり、自分の価値観を変えたりして頑張っているんだなと感じました。同じ実践者の中でも、生まれてくるお子さん、産むお母さんに着目している望月さんと、デイサービスという中で制度を超えた可能性に着目したり、私は死んでいくところまでと、持っている資格が同じでも、着眼点は違うと思いました。また、大学の先生は結果を出すまで統計を取ったり、その後、どういった結果を導くかを考えていらっしゃるの、ぜひつながっていきたいと思っています。質問としては、前川先生の足のお話が今後どういう展開をなさるのか興味があります。一つの部分に注目しながらそれを一生涯に広げていこうと考える前川先生の活動について教えてください。

▼前川:私は山梨県立大学で介護福祉士の養成教育に携わっており、私のフィールドは、高齢者あるいは障がいのある方たちを中心になっています。ただ、健康な足をつくるためには、乳幼児期からの取り組みが必要不可欠です。乳幼児期のファーストシューズからきちんと履かせてほしいと思うと、望月さんが関わっていらっしゃる妊婦さんのママさん教育にもライフステージ全てにおいて足の健康は関わってくるかと思っています。

▼望月:私も元々、骨盤ケアは妊婦さんや産後の方にしてきたのですが、赤ちゃんの発達と合わせて、足がすごく大切だと思っています。立って歩いている赤ちゃんでも、足の反射が消えていない赤ちゃんがたくさんいて、反射で歩いているので、すごく疲れてしまったりとか、そこから寝不足・夜泣きにも関連しています。赤ちゃんが生まれてから歩くまでの人としての学んでいく過程が大事です。足の5本の指がきちんと使えているかのチェックも、来てくれている赤ちゃんにはできるのですが、来てもらっていない赤ちゃんはすごく心配です。大体、ほとんどの赤ちゃんが足の反射が消えないまま立っている現状なので、ぜひ前川さんとは今後もつながらせていただいて、訪問看護とは別になってくるんですが、助産院の活動として今後何か一緒に活動ができればと思います。

▼青柳:皆さんのお話とは変わってくるんですが、私のところは、学生さんが間に入ってくるので世代間交流ができます。しかし、学生と子ども、子どもとお年寄りという世代間交流がなかなか難しいので、望月さんやデイサービスなどと連携でき

れば交流できるのではないかと、そうした連携も必要ではないかと感じています。

▼大塚:佐竹さんは子どもから高齢者に向けた活動だと思いますが、皆さんのお話を伺っていかがでしょうか。

▼佐竹:私の場合は必要だったから今ようになったという感じなのですが、世代間交流が必要だと思うのは、今、核家族世帯が多くなっているの、親から怒られた時におじいちゃん・おばあちゃんといった、ワンクッションになってくれる人たちがいない家がとても多いことが背景にあります。おじいちゃん・おばあちゃんはどうな時でも「あんたかわいいね」「賢いね」と言ってくれるので、子どもの心が支えられることが多いかと思えます。いろんな世代で交じり合っているというのは、一直線のつながりではなく、いろんな方向にベクトルが向いて、落ち込んだ時にも支えてくれるクッションがあるというのは重要な役割になると思います。それでも多世代間で支え合っていく動きは必要だと思って活動しています。

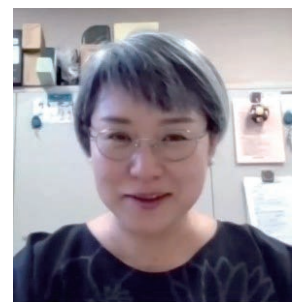
▼大塚:皆さんのお話を聞いて、第1部を考えてみたいと思います。今回、パネリストとして出いただいたのは、知り合いから知り合いを伝い、素敵な活動をしている女性たちがいるよねってことで始まりました。皆さん、「人は生を受けてから死ぬまで、自分の思うように暮らせたが一番いいよね」ということは共通していることだと思います。その中でそれぞれ今までやってきたことを生かしていくこと、地域をつくっていくことになるんじゃないかという発想でこの分科会があります。今回のお話から、儲けるということではなくて、自分自身も含め、一緒に活動していくことがすごく大切だということが共通しています。私も地域活動に一市民として参加して、一緒に活動してお互いに支え合うということは、どのような活動にも共通していると感じています。ただ、皆さんそれぞれの活動をそれぞれの地域でやっているの、対象になる方は限られてきます。山梨県全域を対象としたりすることは難しく、仕方がないことですが、少しずつつながりながら、露木さん、前川さん、望月さん、佐竹さんという中では重なりもありますし、青柳さんも高齢者を対象とした部分では重なりがある活動がそれぞれあって、それをどういうふうにつなげていくかが、今後の課題になると思います。

実際のまちづくりや地域・山梨県・甲府のことを考えると、システム化するとか、定期的にミニ女性会議というか、この分科会のようなテーマで継続して関わっていくことが必要だと思います。皆さんのような方が近くにいる住民は幸せだと思いますが、山梨、甲府の方が自分の人生を考えた時に安心して暮らせるためには、貧困とかコロナで大変な状況もありますが、そのような中で課題を解決していかなければなりません。第2部では、個々の活動をどう連携していけばいいのか、若い人たち含め誰でも参加しやすい形を作るためには、どうしていけばいいのか。そして何よりも、今回活動を知ることができましたが、どうすれば情報を得ることができるのか、発信できるのかを今の時代に合わせて考えていくことも必要です。一人ひとり、活動している組織がつながって、そこに誰でも関わることができ、いつでも情報が得られるようなしくみを考え、第2部では、具体的に皆さんからご提案をいただきながら、検討をしていきたいと思えます。皆さんそれぞれの活動を発展させるためにも、ディスカッションをしていきたいと思えます。

## 【第2部】

▼大塚:皆さま、こんにちは。第9分科会は、生まれてから死ぬまで地域で暮らすということをテーマに検討しています。その中で、私たちが望むような暮らしをどうしていけば実現することができるのかということに視点を置いて第1部・第2部を進めさせていただきます。第1部では、各パネリストの方たちの活動についてお話をいただきました。皆さん、とても素敵な活動をされています。そのエネルギーってすごいなと思えますが、それぞれ活動のスタートは自らの経験からでした。今、必要と感じたことをとにかく実践してみるところから始まり、一人でスタートしたけれど、

必要な人たちが周りに集まりながら、一緒に活動をする人が増えていくという広がりを見せています。これをして儲ける、ではなくて「今、ここで必要なこと」を行動に移しているところが素晴らしいと感じました。分科会をおし、パネリストたちはお互いを知ることができ、顔の見える関係になりましたので、つながれるきっかけになりました。このような関係がどの地域にも広がっていくといいのではないかと考えています。こうした多様な活動をつなげるには、どうすればいいのかということについて、第2部で皆さんと考えていきたいと思えます。私は社会福祉の精神保健福祉を専門としています。地域づくり、まちづくりについて実際に活動する中で、福祉を見てみると、すぐサービスがある所に住んでいる住民と、そうでない所に住んでいる住民とでは、受けられるサービスが異なり、格差が出てきています。それぞれ地域特性を生かしながらその地域で何が 필요한のか、多様な活動がつながるにはどうすればよいか。実際の活動の中では女性が多いですが、男性や学生など新しく移住してきた方、どなたでも活動できるようにするにはどうすればいいのかについても、第2部で検討して



### 第1部まとめ

#### ▶ 活動のスタート

自らの経験から、今、必要と感じたことを実践したところから始まった

・シンポジウムを通して、顔の見える関係になり、お互いを知ることができ、繋がる形となった

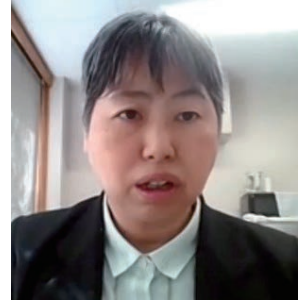
↓  
どの地域でも、多様な活動がつながるにはどうすればよいか

・誰でもが参加・利用できる活動にするにはどうすればよいか

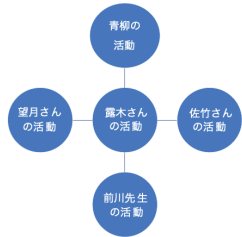


いきたいと思います。それでは、各パネリストから、前半で見てきた課題に対する提案について発表していただきたいと思  
います。

▼**青柳**:地域の中でどうやってつなげていくかということですが、まずは知ることが必要になる  
かと思います。今回、分科会をとおして皆さんの活動を知りました。そのうえで、どういうふう  
に活動をつないでいくか、自分なりに考えてみました。まずは個々の活動を連絡などで単につな  
ぐ。次に、学生さんにそれぞれのところに行って活動を体験してもらい、お互いの活動の潤滑油  
になってもらうのも一つの考え方かと思います。もう一つは、山梨県には「にじいろコミュニ  
ティ・サポート」という7つの子ども食堂が集まった共同体があります。この共同体では、高齢  
者の介護保険外のサポートをするようなグループも入っています。グループでは、シングルマ  
ザーの方に仕事を手伝ってもらい、収入にしてもらい、一つの共同体となっています。このよ  
うな形も一つの考え方かと思います。さらに、私の活動の中で、巡回型の活動があるのですが、これを活用し、露木さん、佐竹  
さんのところに行ったり、来てもらったりする方法もあるかもしれません。



1. 個々の活動をつなぐ



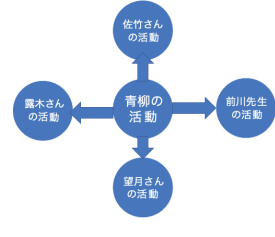
2. 学生を通してつなぐ



3. 一つの共同体をつくる



4. 巡回型の活動



▼**大塚**:ありがとうございました。学生が学びも兼ね、潤滑油になっていくところでは大学と皆さんの組織とのつながり  
になるかと思います。次に前川さん、お願いします。

▼**前川**:「足の健康をキーワードにした産学官連携のあり方」についてご提案させていただきます。  
足が健康であるためには、靴との関係性が重要です。皆さまは、靴を選ぶ時の選択基準はご  
存じでしょうか。これを学校で教えていただいたことはありますか。また、足に合わない靴や間  
違った靴の履き方は足を痛めます。そして、爪がどんどん変形していきます。特に、足爪は身体  
の土台です。歩くために必要であり、重要な身体の一部です。体重がかかったとしても痛まな  
いようにケアをすることが必要です。変形した爪では十分に歩くこと、自分で爪を整えることは  
非常に困難です。日本人は、下駄や草履の文化で長く暮らしていました。足を包み込む靴が一般  
的に生活に取り入れられるようになったのは、明治時代、約140年前からと言われます。しか  
し、日本の生活様式は、屋外に出る時は靴を履き、室内に入る時には靴を脱ぐという文化が  
継続されています。一方、一日中、靴を履いて生活をする欧米では、美容院の感覚で、足  
のお手入れというもの生活習慣にあります。歩きにくくなることを老化現象と簡単に考  
えなくてください。ケアマネなど専門職も筋力低下と簡単に評価しないでほしいと考  
えます。足の爪は整っているか、タコや魚の目、痛いところはないか、サイズが合った靴  
を着用しているか。これは高齢者だけでなく、子ども・成人・大人、全てのライフス  
テージで必要です。魚の目、痛いですね。痛みがあれば普通には歩きません。皆  
さんは、痛みを軽減するためにはどこに行きますか。特に成長期の子どもには、足が  
どう成長するかを知ってほしいと思います。足の成長を妨げないために、どうや  
って靴を履けばいいのか。この下駄箱を見てください。かかとを踏んだ靴ばかりが  
並んでいます。かかとを踏むことが、なぜダメなのか。足の健康のため、これ  
からの人生のため、ぜひ知ってほしいと思います。



足が健康であるためには、

- ①適切なサイズの靴 ②正しい靴の履き方
- これを教えてもらったことはありますか？
- 不適切な靴や間違った靴の履き方は、足を痛めます
- 特に **足爪は身体の土台です**

体重加圧しても痛まないようにケアが必要

特に、成長期の子どもに知って欲しい

- 足の成長を妨げない靴の着用
- かかとを踏むことが何故ダメなのか
- 足の健康のため、これからの人生のため

写真引用: 産学官連携「足健康」推進協議会、靴の履き方...  
https://www2.nippon-u.ac.jp/~shinshu/entry/12454422593.html


私は老若男女問わず、足を大切にすることを広めたいと考えています。高齢者になってから介護予防に取り組むのではなく、  
幼児期から足を診る文化が定着することを望みます。学生・子育て期の方、介護・看護従事者など、多くの人に分かってほしい  
です。その情報発信基地として、地域の居場所やいきいきサロン・子育てサロン・子ども食堂などさまざまな場所でフットケア  
の心地よさを発信したいと考えています。教育は大切です。私が望む教育とは「今日、どこに行く?」という教育です。地域に出

かける場所がある、誰かと時間を過ごすことができる場所がある。孤立しない、させない。誰かとつながりのあるまちづくりをしていくことを求めます。大学としての研究力、福祉や介護事業所の実践力を市町村が策定するまちづくりの計画に活用していただくことはできないのでしょうか。生涯のライフステージとおした健康づくりが可能になるようにと願います。ごく普通に「今日は〇〇でフットケアがあるから足を診てもらおう」というふうにフットケアが身近にあることを望みます。フスフレーター、ケアセラピストなどフットケアの資格保有者がいますので、ぜひ知っていただきたいです。

**教育：今日どこに行く？**

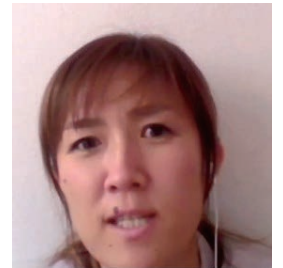
- 地域に出かける場所がある、誰かと時間を過ごすことができる場所がある
- 孤立しない、孤立させない。誰かとつながりのあるまちづくり
- 大学としての研究力、福祉事業所の実践力をまちづくりの計画に活用できないか

健康寿命の延伸には、生涯歩行の獲得、歩行・移動能力が必要です。フットケアの資格（フスフレーター、ケアセラピスト等）の保有者の紹介と活動の場を提供してください。

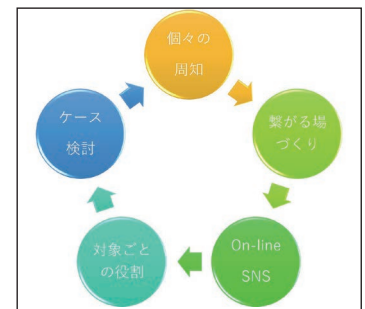


▼大塚：前川さん、ありがとうございました。実際の活動をとおし、今後どのように地域に活かしていくかというお話でした。次は望月さんのご提案をお願いいたします。

▼望月：自身の活動をとおして連携のための提案ということで、お話しします。私はずっと助産院をしています、助産院のつながりの中で、連携の難しさを感じています。助産院が単独の医療機関であるということと、出産を扱っているかどうかなど、それぞれの地域で助産師の活動内容が違うので、横のつながりを作るのが難しかったです。ですが、同じく登壇している露木さんとの出会い、助産院だけではなく、訪問看護という手段を始めさせていただいたことで、大きく連携の形が変わってきました。まず医師との連携が強くなりました。また、一人の患者さんに携わる多職種との連携が可能になってきました。助産院同士の横のつながりでは、どうしてもライバルになりやすく、一人の方に対してどう協力するかということまでいかなかったのですが、訪問看護ステーションという形をとることで、助け合いや協力をする関係が生まれました。私たちの訪問看護ステーションは、山梨では珍しい周産期特化型です。訪問看護というと、おじいちゃん・おばあちゃん、在宅での関わりというイメージが強いので、赤ちゃんや妊娠・出産を経験した方ということでは、一からイメージを変えることから始めました。



病院からの依頼もあり、医師や多職種との連携は強くなってきましたが、それでも自分たちからつながる多職種との連携は今でも弱くて、一人のケースに対して、同じ地域でどんな職種とつながれるかは、今でも見えてきていません。多職種・専門職同士がつながれる場というものを定期的につけていけたらいいと思います。つながれる場ができたなら、オンラインやSNSで広げていきたいです。ただ、連携していく人たち自身が対象ごとの役割を明確にしていないと、どうしてもライバルになってしまい、仲間にはなりにくいので、自分たちの役割を問いかけながら、明確にしながらやっていくことを大前提にしたいと思います。さらに、ケース検討を密にやっていける場所や状態があると、すごくいいと考えています。



▼大塚：ありがとうございました。どなたも連携というところでは、それぞれの活動の中でご苦労されていることがお分かりいただけたかと思います。佐竹さん、ご提案をお願いいたします。

▼佐竹：「デイサービスセンターつづく」の佐竹です。「どういうふうに連携できるといいんだろうか？」と考えた時に、私はこの写真を持ってきました。皆さんは、どう感じますか。この2人は夫婦ではなく、たまたま「つづく」で出会ったおじいちゃんとおばあちゃんですが、夫婦のようにずっと寄り添って過ごしています。本当に自宅の一部を切り取ったような写真です。私はこの2人が本当に幸せそうで微笑ましく、自分も幸せをもらっています。私は単純に、目の前の幸せそうな風景を守りたいなと思っています。



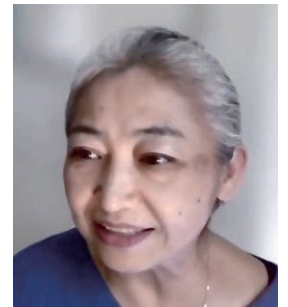
幸せそうな風景は、人それぞれ違うと思いますが、私は、多くの人たちの協力や理解があって得られるものではないかと考えています。私たち専門職は福祉・介護・医療など学生のうちからすでに分野ごとに縦割りで分かれています。そして学校を出て最初の就職先は、だいたい行政・病院・大きい福祉法人など、大きな組織で「箱もの」と呼ばれるところで、対象になる方と出会っていくのが一般的だと思います。就職後、初めて出会う人が、すでに箱の中で困っている状態だと考えた時に、その人自身が元気で過ごしていたところに思いを寄せる時間はあるのかなとか、地域で過ごしている時の生活が見えているのかなということを疑問に思います。私たちの仕事はその延長線上にあるので、出会った方々の生活、その根本を知っておく必要があると思っています。



私が過疎地域で集落支援をやっていた時代、コミュニティーナースの養成講座を受けました。そこでは看護師が、病気になってから出会うのではなく、病気になる前に地域で出会っていくことが必要だと学びました。私たち専門職はできるだけ建物の中から地域に出て、人々の生活を知っていく必要があると考えています。実際私も、目の前の出会った人たちに向き合って日々取り組んではいるのですが、その中でうまくいったりいかなかったりを繰り返しながら、何となくこういう傾向があるかなという中で働いています。多職種間で連携すれば、私たちの視点では見えなかったものが、他の視点では見えることもあるので、ぜひ連携を図っていきたいです。今回、出会えた大学の先生方には、一緒に根拠となるようなものを見つけていくような研究に取り組んでもらえば、私たちの自信にもつながり、活動がどんどん広がっていくと思います。施設や事業所でも「出入り大歓迎!」というネットワークを作り、場所を一覧にし、皆で「今日はここにいてみようかな」と出入りができるようになると面白そうだと思っています。

▼大塚: ネットワークづくりやさまざまな方が出入りできる場所として活動する佐竹さんだからこそのつながりの重要性についてお話いただきました。最後に露木さん、ご提案をお願いします。

▼露木: 今後の連携への課題を私なりに考えてみました。今回、女性会議が開かれることになって初めて、同じ分野で同じ方向を向いている女性がいることに気づきました。でも長い間活動をしているのに、気が付かなかったのはなぜだろうと考えると、私自身、自分の仕事に没頭していて、自分のしていることを発信している時間も暇もない、それに発信する場所もありませんでした。ロータリーやライオンズ、商工会議所などの社会経済活動をしている分野において、女性参画が少ない、特に福祉や医療関係者の参画が少ないことも課題ではないでしょうか。実際、私たちは何をすべきかという、できたつながりを絶たないで、継続的につなげていく必要があると思います。これを定期的な会合にして、定期的な情報発信を一般市民や学生さん、より多くの女性に行う機会を得ることが大事です。そのためにも私が開いた「晴ればれ」で勉強会を開こうと決心しました。「晴ればれ」きる範囲で小さくまとまっていたのですが、今日のパネリストの皆さんとのつながりからつながりを見つけて、いろんな方に参画を促していきたいなと思います。私のところでは子ども食堂も開いています。そこでは看護学生さんや県立大学の学生さんのボランティアをお願いしていますが、一部の人に留まって、広がらないのが課題です。より多くの方の参加を呼びかける方法を大学の先生方に教えていただけたらいいなと思います。



さらに裾野を広げて文化を変えたいと私は考えています。包括ケアシステムの中で、私たち看護も、ヘルパーたちの介護も、「して差し上げる」という思いがあり、私たちの価値観を押しつけているような気がしています。真の共生社会に変えるためには、誰もが参加できて、誰もが考えていく、どんな人も、病気になることも、年を取ることも、老いていくことも、死んでいくことも、誰かが何かをしてくれるのではなく、全て自分のことだと考えるような文化をつくっていかねばならないと思っています。そのために、子どもたちにプラネタリウムやナース体験などをとおし、看護として、私個人として、また会社として、何を考えているかをきちんと伝えていける場をつくっていきたいです。今年も会社でピンクリボンの募金活動を行いました。こうした社会活動に会社ぐるみでチャレンジしていくことも大事かと思っています。広げる、つなげる意識を個人としても持ち続け、会社や看護協会などのような組織の中でもその必要性を広げていきたいと考えています。

▼大塚: 皆さんのお話をお聞きして、連携がなぜ必要なのかについて考えてみました。活動は連携しなくてもできます。ただ、限られた活動になってしまいます。露木さんのおっしゃっていたように社会の中で活動が位置づけられていくことは重要なことだと思います。活動をとおして、人が社会の一員として位置づけられていきます。何で連携が必要なんだろうと考えると、人が孤立しないほうがいいのと同じように、活動も孤立しないことがとても大切です。孤立してしまうと内側を見がちなので、外に目が向けられる余裕が無いとなかなかつながっていきません。連携と言うのは簡単ですが、実際には、皆さんこれだけの活動を数年かけてやられているのに、全く知りませんでした。今回の会議をきっかけに知ることができたのですが、連携するためには互いの活動の情報を知る必要があります。

では、情報を発信し、つなげていくにはどうすればいいのでしょうか。この後、検討したいと思いますが、その前に皆さん、まず活動を広げていくというところで、誰もが参加できるようにしたいという点は共通しています。しかし、なかなか若い人・学生さんが参加してくれないという難しさがあります。その辺について考えていきたいです。まず、学生さんたち、活動に関してなかなか実践に移せていない点についてお話を伺えますか。

▼学生: 福祉を学んでいる身ではありますが、現場で学ぶ機会はなかなかありません。敷居の高さを感じてしまいます。将来、福祉関係で働きたいと思っています。働きはじめは不安や孤独になってしまうこともあると思うが、その前に色んな活動を経験していれば、就職後も自分の専門性に活かせるし、つながりも生まれると感じました。そういう面でも学生のうちから、いろんな活動への参加や、さまざまな活動をしている方がいることを知ることは大切だと分かったので、お互いに関わ

りが持てる工夫を考える必要があると感じました。

▼大塚:現場でやっている側としては、「全然、敷居高くないよ」って思っていると思いますが、何が高く感じるのでしょうか。

▼学生:資格を持っているわけでもないし、知識・スキルも足りていないので自信がなく、怖気づいてしまいます。

▼大塚:「まだまだ学んでいる身だから自分が参加していいのかな」とか、「何かあったらどうしよう」という不安が多くあるってことですね。でも、現場の方たちは、「その人が楽しそうに積極的に関わってくれていれば、それでいいよね」って思っていますよ。なかなかその壁って難しいですかね。パネリストの皆さんのご意見はいかがでしょうか。

▼佐竹:学生さんにすごく共感できました。私、産婦人科が苦手で、実習もトラウマになるくらい嫌でした。そのうえ、就職した先で配属されたのが産婦人科で、すぐに辞めようと思っていました。妊娠・出産をしたことがなかったのも、お母さんたちの気持ちも分かりません。でも、助産師さんと話しているうちに、経験値や知識不足のせいで怖気づいていることに気づかされました。それからは、いろんなケースの患者さんに会っても、自分が全部受け止めなきゃ、理解しなきゃということよりも、自分は自分として、分かる範囲でできることをやっていき、少しずつ経験になっていけばいいのかなと思うようになり気持ちが楽になりました。

▼青柳:学生さんを教育する立場としても、機会を作ってこなかったということに反省があります。活動に入っていくやすいように、授業の中に位置づけたり、ボランティアとして取り組むなどですね。まずは、見学でいいと思いますので、そのうえで、少しずつ仲良くなっていって活動に入っていくことも考えられるのではないのでしょうか。

▼前川:私に関わっている足の健康やフットケアは、なかなか看護・介護の教育の中でも光が当たらない部分です。皆さんも、学んだことはありますか。

▼露木:実はないです。でも、施設やお年寄りの家に行くと、足にトラブルを抱えたお年寄りが非常に多いことに気がつきます。病院勤務の看護師をしている時には気づきませんでした。

▼佐竹:お風呂の介助の時などに、爪の白癬から始まって、指が変形した方などにお会いしますが、独学に近いです。授業の中で習ってきていないので自分で調べながらやっています。爪が伸びすぎていたり、切り方も自分の感覚や経験値で行っています。以前、看護師が爪を切りすぎて訴訟になった事件もあり、知識が無いとトラブルになってしまうのではと日々の中で自分が行っている行為にちょっと怖さを感じる時もあります。

▼前川:足の健康は、介護福祉士養成教育の中でも、そんなに長い時間学ぶことがない分野で、最近水面に上がってきた新しい分野です。ドイツ式のフットケア「フスフレーゲ」の資格もようやく20年ほどになってきました。その時代ごとに、新しい課題がたくさん上がってきています。青柳先生が関わられている空き家の問題など近年クローズアップされてきた課題だと思います。新しい課題は時代とともに出てくると思うので、気づいた課題はどんどん声を上げていく必要性を感じます。露木さんのご発言の、経済界にも声を上げていくというお話は、目から鱗でした。

▼大塚:活動をどう知ってもらい、参加してもらうか、若い人たちには教育の分野でどう知ってもらおうかというお話をいただきました。教育現場の役割としては、個々に行われている活動の意味を一般化していき、意義・効果を見える化することだと思います。同時に、社会の中での課題の抽出ですね。福祉は社会の変化によって出て来た課題に対応するために研究する学問ですので、社会の課題を抽出していく役割もあると思います。もう一つは、学生さんへの教育です。そういう中で、情報提供をどうしていくのか。情報を自分たちで発信していくことはもちろんですが、関心を持った人がどう知っていくかが課題です。では、自分たちの活動についての情報を届ける方法について、伺いたいと思います。

▼青柳:それは私も課題だと思っています。地域の方に向けてポスターを張りチラシを配っても、人が集まらないので困っていました。一つは自治会とか既存のグループにお願いをして知っていただくことがあると思います。若い人だとSNSやフェイスブックでお話できるとは思いますが、高齢者を集めたいとなると、なかなか難しいです。電話か手紙くらいしか思いつきません。皆さんからお知恵をいただければと思います。

▼露木:私の「暮らしの保健室晴ればれ」は甲府市中央で開いていますが、そこを賑わうようにしたいと思った時、目的を絞ってしまうと難しかったです。実際は、看護師が作る健康ランチを売るお店として、いろんな人に入ってもらい、意見を聞く場にしました。その中から、既存で歌声教室をしている方や手芸をしている方々に教室を開催してもらい、参加してもらいたい人を集めて、グループづくりをしています。その中で時々、介護や医療についてのお話をちょっとだけ聞いてもらえる場も開いています。子ども食堂を手伝ってくれる学生ボランティアさんは、来る方が固定していて、先ほどの話で敷居高かったのかなと気づきました。また、学生さんや大人のボランティアにも賃金を払ったりしていますが、なかなか増えない状況です。





その点は今後、先生方とご相談できればいいと思います。

▼前川:私の場合は、身体の一部の足を見せてということで、恥ずかしさもあり、すでにトラブルを抱えている方は第三者に見せることを躊躇される方が多いと感じているので、他の方のお力も借りるようにしています。私が出向いているのは山間過疎地です。一つの集落に8軒しかなかったり、高齢化率が52%というエリアです。そこに関わっている地域包括の職員さん、民生委員の方たち、いきいきサロンの運営をしてくださる方たちから「面白おかしく、足の体操をするんだって」などと伝えてもらって利用者を集めています。私が動くというよりも、自治会長や民生委員が動いていただけているので、人数が集まっているのかと思います。山間過疎地でイベントが少ない地域なので、楽しんでいただいている面もあるかもしれません。自分が頑張るといっても、動いてくれる協力者を見つけ、頼んでしまうかたちで、細々と活動を継続しています。

▼佐竹:「つづく」のフェイスブックやSNSは作っていますが、見つけてもらえなければつながりません。こちらから発信したい情報と、皆さんが得たい情報とのニーズをマッチさせることの難しさも感じています。つながってほしいと思っている人たちは、目の前の生活でいっぱいいっぱい、情報を得る気持ちの余裕が無いのかもしれないところが難しいです。実際、最近はやングケアラーの問題もあり、利用者さんを送迎しながら、家庭状況を見守るという意味でなるべく家の様子を確認するようにし、お困りになる前に支えたいと思っています。しかし、それでつながれるのは数件で、行政であれば相談の窓口もあるので、行政との連携も取りたいと思っています。行政の名前が出ると、信頼度が上がりますから、協力や連携ができればいいと思います。

▼大塚:学生さんは、どうやったら情報を得やすいと思いますか。

▼学生:学生はSNSを使いますが、調べたいことを調べなければ情報を得られませんので、多くの人に広めたいとなると、SNSでも難しいのかなと思います。福祉を学んでいる私たちが潤滑油になれば、他の学生や地域の人に情報を伝えていけるのではないかと思います。

▼大塚:学生さんにスピーカーになってもらうということですね。私たちは、産学官で連携や情報提供ができていくのではと思っています。公的なところでは、身近には、民生委員さん・行政・自治会・社会福祉協議会がありますが、どのように日ごろから情報交換をして地域づくりのシステムを作っていくことが課題ではないでしょうか。また、人を呼ぶ活動は、プログラムとして何がいいかを考えてみましたが、健康については皆さん関心を持っています。具体的に集まっていただくには、食べることが絡むと参加しやすいと思います。そういうことをたまにやりつつ、色んな人に集まってもらってそこから情報発信をして、さらに広めることを取り入れていくといいかもしれません。



ここからは、民間の活動だけではなく、教育機関・公的機関でそれぞれの役割は何かを考えていきたいと思っています。教育に関しては、活動を客観化して見える化していく研究、若い人を育てていく教育、社会の課題を抽出していくという役割があります。民間の方たちは、社会の地域づくりにつながっていく、誰でも参加・利用できる場づくりを実践されています。では、公的機関・行政と私たちはどうやって協力できるのかを考えていきたいと思っています。行政と協力していきたいと考えているのは、どんなことですか。

▼青柳:公的機関には、私たち個人がやっている事業をリストアップして、どこに、どういったものがあるのかを見える化してほしいです。

▼佐竹:リストアップの時に、それぞれの事業所の特色についても把握してもらえると、連携が必要になった場合、特色に合わせた声かけで私たちもチームになりやすいかなと思います。

▼露木:特に甲府市は大きいので、担当者が変わったり、課と課のつながりがなかったりして困ることもあります。リストアップしようにも、たくさんあって大変だと思うので、行政・大学・民間で一つのチームを作ってやっていかないと継続していかない気はします。

▼前川:産学官の連携は、非常に有意義なことだと思います。その中で、官に何を望むかということですが、私はいろんなところの声を吸い上げてほしいと思います。行政をちらつかせることで動いてくれる人がたくさんいるならば、市民の声を聞く会議の場や催しを実施してほしいです。

▼大塚:第2部では、皆さんのご提案から考えてきました。まず連携が一つ、どうしていけばいいか、そして情報をどのように分かち合っていけばいいかについては、課題を出すだけではなく、私たちは解決していく方向に動いていかなければなりません。まずは、行政とも協力しながら、どういう所にどんな活動があるか、活動マップを行政・民間・学生で一緒になって作っていくことが求められると思います。その前段階として、やはりつながっていないと、情報が集まりません。私たちが分科会後につなげていく活動として、活動マップづくりを挙げたいと思います。同時に、顔の見える個人個人のつながりの交流会を土台としてやりながら、そこに公の部分が重なっていくと、情報共有しやすくなると思います。活動マップができれば、行政のホームページに掲載してもらうとか、社会福祉協議会や自治会で配っていただくこともできます。第9分科会としては、今がスタートということで、皆さんのように素晴らしい活動をしている人たちがお互いに知り合うことが第一段階。そのために、私

たちが中心となって交流の場を定期的で開催し、口コミで広めていければと思います。そこに行政の人にも参加してもらいながら、活動がどんな所で行われているかを知ってもらい、活動マップにして、見える化していくという具体的な活動を提案したいと思います。学生さんたちにも協力してもらい、何が情報として必要か、敷居が高いと感じる部分をどうするかなどについて考えていきたいです。福祉では支援する側・される側という言い方をしていますが、そういう意識を変え、互いに必要とされる存在であること。この日本女性会議の理念である多様性が尊重される社会をつくるためにも、病気があろうが、高齢になろうが、障がいをお持ちだろうが、一緒に市民の一人として参加できる場を作ることを目指して、仲間として活動していくことが重要なのだと思いました。個々の活動をしながら、活動同士が結びつき、出会いがあって、そこから情報を共有し、互いに支え合いながら、行政の協力で活動マップの形になり、見える化していく。こんな活動を第9分科会としての今後のプランにしていきたいと考えています。

▼青柳: いろんな方のご意見を聞かせていただき、今後連携していければいいと思いました。ありがとうございました。

▼前川: 今回、思い切って参加をしたことで、素敵な出会いになりました。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

▼佐竹: この場でなければ、大学の先生方とお知り合いになることはなかったのですが、今後もつながりができていけばいいなと思います。これからもよろしくお願いします。

▼露木: 腹を割って話すってこういうことかなと思いました。ここから、本当の意味でのまちづくり、地域づくりに取り組むことができ、自分の生き方を考えていけると思います。楽しい時間でしたし、仲間づくりができました。ありがとうございました。

▼学生1: 学生としてつなぐ役割もあると感じましたし、皆さんがやっている活動にボランティアとして参加するのも楽しそうだなと思いました。いろんな活動に自分たちから足を運んでいくことも地域づくりには必要だと分かったので、これからも目を向けていきたいです。本日はありがとうございました。



▼学生2: 皆さんそれぞれがビジョンを持っていて刺激になりました。自分もこれから資格を取り、専門職として働く中で、皆さんのようにしっかりとビジョンを持ってやっていきたいと思いました。

▼学生3: 皆さんの活動のそれぞれが面白いし、素晴らしいと思いました。この機会に、活動がつながっていくことで、いろんなところへの支援につながっていくのかなと思います。私たち学生も今日の話を参考にしながら、いろんな活動をしていきたいと感じました。

▼学生4: 皆さんの活動の中で見えてきた課題がすぐ分かりやすく、私も「そうなのか」と確認できたのが嬉しかったです。また、皆さんが学生を必要としてくれていることが分かったので、気が楽になりましたし、参加してみたいと思いました。

▼大塚: 第9分科会は去年から検討を続けてきましたが、最初から学生さんとも一緒に検討できたのはとても大きなことで、私たちの活動はきっとこういう活動を目指しているのではないかと感じております。今後は、まずお互いを知り交流をして、その後、情報という客観的なものにつなげ、それがまちづくりにつながって発展していくと嬉しいです。山梨だけでなく、もうすでに上手に活動をされている地域もあると思いますが、自分の住んでいるところが、生まれてから死ぬまで安心して暮らせるという環境づくりは、誰にとっても重要なことだと思いますので、全国の皆さまも、考えるきっかけにいただけたらありがたく思います。また、第9分科会をとおして仲間づくりができ、私の財産になりました。今回、身近な関係性が築けたと思いますので、今後もこの関係性を大切にしていきたいと思います。

全国から参加して下さった皆さま、ありがとうございました。

第9分科会：生涯活躍・健康

取組み方針

○交流できる場づくり

個々の交流する場を作る、行政との連携

地域づくり、だれでも参加できる場づくり

○情報の発信

行政・民間・教育が一緒になって活動マップを作成する  
既存のグループ、SNS等の活用

○人づくり

研究・学生の育成、社会課題の共有  
継続的に行えるチームづくり

第9分科会：生涯活躍・健康

未来の目指す姿

医療・介護・福祉・教育のそれぞれの  
分野が協力・連携し、  
行政と協働する地域住民が支え合う地域